

太田正雄の愛知医大教授就任

について

長門 谷 洋 治

昭和五十九(一九八四)年、『木下李太郎宛知友書簡集』(二卷、岩波書店)が刊行された。ここには七八六通の書簡が採録されているが、その中に彼の皮膚科学の師土肥慶蔵の書簡一通(三九七番)がある。それは大正十三(一九二四)年四月十六日付のもので、書留印があり、米国經由仏国行日本大使館気付となっており、パリのRecamierホテルに転送された。太田正雄は大正十(一九二一)年よりフランスを中心に欧米に留学中であった。土肥は当時東大教授で皮膚病微生物学講座を主宰していた。この手紙は千三百字余のかなり長文のものであるが、要するに愛知医大(名大医学部前身)の皮膚科学泌尿器科学講座を担当しないかというものである。太田正雄(一八八五—一九四五)は明治四十四(一九一七)年東京帝国大学医科大学を卒業、約半年間衛生学

教室で細菌学を学んだのち、土肥の教室に入ったが、このことを奨めたのは森鷗外であった。大正五(一九一六)年奉天の南満医学堂教授兼皮膚科部長になったが、これは「貴兄は奉天あたりまで御無理を願った関係もあり人一倍考慮を払ひ候へ共」とあるように土肥の意向によるものであった。同九(一九二〇)年帰国後約半年で上述の外遊に出るが「先年御出発の際の如き他人を介してお尋ねに相成つては一層口外に苦しみ候間只通り一遍の挨拶に止め置候次第に御座候」ということで「只人伝に承り候へば東京以外は御免だとのこと故少し面倒を覚え候のみに御座候」であった。「尤も昨年初め慈恵大学の高木男に交渉せしこと有之」だったが返事がなかった。しかし「一昨年頃北里博士より相談あり。小生の愚存も申上候に付多分其方面に御内約が成立し、其が為め御飯朝延引のことと察し」へ形勢の推移を傍観致居たところ「両三日前長興博士より貴兄のことを河本君より交渉あり。技師は欠員なきも嘱託なればできるがとの話有之候」であった。北里の話は北里研究所のポストか慶応大医学部皮膚科教授のことと思われるが、長興のそれは伝研内のポストのことであろうか。この長興の

話には土肥も賛意を示さなかったようであるが、今日山崎博士被参田村博士昨今放射線学に熱中、皮膚科を貴兄に譲りたく是非貴兄に交渉して呉れと頼まれたりとのことに御座候。へ小生の希望としては他の教室出の諸氏の如く御一身上の事を小生に御一任置被下候はば悪しきやうには取斗申間敷と存候。へ愛知よりの交渉の有無に關せず御隔意なき御内意を承るを得ば好都合と存候。とする。

当時の愛知医大の学長は山崎正董で、皮膚科には同門の田村春吉が現職として就任していた。田村と太田とはとくに親しく、本書には田村の書簡八通が採られているが、その一が目付で先の土肥より九日前の四月七日のもの（三九五番）である。この中で田村自らが太田の教授就任を誘っている。これによれば山崎がパリに行き太田の世話になったこと、その山崎が皮膚科にもう一人教授をおいてよいと述べたとし、それとは別に田村が一月、東京で入澤達吉に会ったとき、入澤も太田の位置に就ては心配しているが、今日の東京では太田を入れる所はない、名古屋でどうかならぬかと。田村は太田と二人でやりたいが、自分では交渉しにくい、たまたま外科教授後任の件で山崎が八日に

上京する。そのさい入澤とも会う機があり、上記の話もでるだろう。へ小生は兄と皮フとウロを交たいに部長になればよいと思ふ

土肥書簡より約二カ月後、六月十八日付、母よしからのたより（四〇二番）では十月の帰国を待つとある。七月十二日付山崎書簡（四〇五番）では、二、三日前土肥先生より書状参り、それによれば貴下には弊学に御來任の事御承諾相成候赴にて、土肥先生より任用方御依頼などの御詞も有之一同大に欣喜罷在候。とある。

大正十三年十月、太田は愛知医大教授となったが、その在任は短く、同十五（一九二六）年十月には東北大学医学部に移った。同年八月二十一日遠山郁三よりの書簡（四六三番）へ此度小子土肥先生の後任として東大へ転任することにて内定致候に就て、東北大学医学部にては貴兄を御招聘申上度希望にて御快諾を得度御待申上居候處昨日布施学部長よりの電報にて御承諾被下候趣拝承任欣喜に不堪次第に御座候。と。そして昭和十二（一九三七）年、遠山の東大退職のあとを、第三代の東大皮膚科の教授となった。

太田が東大教授であったとき、京大の皮膚病梅毒学講座

の教授は松本信一（一八八四～一九八四）であったが、彼は
大正七（一九一八）年より昭和十九（一九四四）年までの二
十六年間にここで過した。教授になるには自分の意志もさ
ることながら、周囲のいろいろな条件が加わってくる。太
田の場合は来簡が保管されていたことに加え、日記も残っ
ており（ただし教授就任のいきさつなどについては多くを語っ
ていない）その経緯のよく判る稀有な例であると思う。『知友
書簡集』公刊の意義は大きい。

（大阪府豊中市 皮膚科開業）

芳名録（金沢医学専門学校） について

寺 畑 喜 朔

資料検索中、金沢医学専門学校時代の来訪者の芳名録が
発見された。記名は明治四十一年から大正十一年までで、
主な医学関係者を摘録するおとぎのとおりである。

内田守一（明41・10・13）池原康造（明42・1・27）三宅秀
（明42・6・7）志賀潔（明42・7・8）芳賀栄次郎（明43・
3・30）鈴木寛之助（明43・7・16）三輪徳寛（明43・8・9）
長井長義（明43・12・6）平山増之助（明43・10・6）佐藤三
吉（大2・8・19）蔡文森（大2・10・30）久保猪之吉（大
5・8・12）荒木寅三郎（大5・9・6）青山胤通（大5・
10・17）藤浪剛一（大6・6・22）北里柴三郎（大7・10・
13）スロイス（大9・5・20）国友鼎（大9・6・14）沢田敬
義（大10・7・8）尼子四郎（大11・3・24）

以上の来訪者のうち、来訪の目的と内容の判明した事例